

研究紀要 8 4 これからの図画工作・美術科における鑑賞指導に関する研究

山本佳代子（鈴鹿市立石葉師小学校）

西村 聡（津市立高野尾小学校）

細野 篤子（津市立豊里中学校）

中村 照美（津市立南郊中学校）

中村 秀文（三重県総合教育センター）

浜政 敬能（三重県総合教育センター）

1 研究の趣旨

図画工作・美術科の学習は、表現と鑑賞の2つの領域の学習を通して行われ、これらはお互いに影響・感化しあう表裏一体のものである。しかし、これまでは、どちらかという表現活動に偏りがちであったり、単なる知識の伝達に終始する鑑賞指導が行われてきたのではないだろうか。

本研究は、児童生徒の多様な見方、感じ方を育てることを主眼におき、望ましい鑑賞力を育てる指導のあり方について、子どもたち自らの主体的な活動を通して、また、アート・ゲームや校内展示等の実践を通して検証するものである。

2 研究の内容

(1)内容

ア 理論研究

学習指導要領及び鑑賞教育（指導）に関する資料、文献をもとに、先行研究の検討を行った。また、これらの先行研究をもとに鑑賞指導の現状と課題について検討し、研究の方向性を把握した。

イ 研究の仮説の設定

主体的な鑑賞指導を進めることにより、子どもたちの興味・関心を喚起し、鑑賞活動と表現活動との関連を図ることができる。

アート・ゲーム（ゲーム方式を取り入れた美術教育の学習活動、または、その教材をいう）を授業に活用することにより、遊びの要素を取り入れるなかで、作品鑑賞のポイントを身につけさせ、楽しく鑑賞をする基礎を培うことができる。

校内展示や日常的な活動の中での鑑賞を工夫することで、豊かな情操を養うことができる。

ウ 実践研究

仮説を検証するために、各校の児童生徒の実態や各校の状況を考慮しながら、検証授業を実施した。

(2)方法

ア 授業実践事例等

【事例1】「不思議だな・きれいだな」小学校・第6学年

【事例2】「鑑賞教材導入による自画像の制作」中学校・第3学年

【事例3】「自分たちの作品で、カルタ遊び」小学校・第5学年

【事例4】「このひと、どんなひと」中学校・第1学年

【事例5】「日常的な名画鑑賞の取り組み」小学校

3 研究のまとめ

児童生徒の多様な見方、感じ方を育てることを主眼におき、望ましい鑑賞力を育てる指導のあり方について、仮説を立て、それを検証するために授業実践等を行った。それぞれの仮説はおおむね立証され、見方や感じ方は「みんな違う、一人ひとり違う」ということを子どもたちが認め合え、鑑賞の楽しさが深まり、豊かな情操を育む一助になったと考える。ただ、年間指導計画の中での鑑賞の位置付けや、鑑賞資料、鑑賞教材の選択にあたっては、児童生徒の発達段階を十分考えて、より適切なものを今後も検討していく必要がある。